

マリクレール・ヴィダル アリانس・フランセーズ仙台新院長 就任のご挨拶



福島の皆様へ

先月から仙台アリانس・フランセーズの院長となりました。最初に少しだけ自己紹介をさせていただきます。ヴェルサイユで生まれ、長い間パリに住んでました。フランス語の教師となる前に20年間映画とイベント業界で働きました。

アリانس・フランセーズは、フランス語とフランス文化を世界に広めることを使命とし、世界128カ国に832の施設を持つネットワークです。これらの施設の特徴は、すべての施設がネイティブスピーカーによって運営されていることです。つまり、2つの文化が出会い、共に働くことを望むことで生まれる、真のアライアンスなのです。

仙台アリانس・フランセーズでは、グループまたは個人で受講できる全レベルのフランス語コース、文学や歴史などの文化的テーマを扱うコース、時事問題をもとに現在のフランス社会を理解するためのプレスコースなどを用意しています。また、夏の間は、毎週木曜日のアペリティフタイムに、フランス人が大好きなお酒を飲みながらの会話コースもスタートします。

毎週土曜日には福島に来て、福島県日仏協会と共同で終日フランス語講座を開催しています。アリانس・フランセーズは、異なる文化を理解し、受け入れるための素晴らしい場です。私たちは、フランス語を学ぶことを通じて、言語の力と文化の多様性を体験することができます。

さらに、他の言語や芸術に触れることで、私たちはさらなる共通点を見つけることができます。

フランスで長年言語と文化を学んだこの国で、日本のアリانس・フランセーズで働けることを嬉しく、光栄に思っています。東北はまだよく知らないのですが、仙台の並木道や山が近いところが好きです。これからもっと深くこの地域を知っていくのが楽しみです。

特に、福島の街や人々のことをもっと知りたいと思っています。皆様がお住まいの福島は、2011年に非常に困難な出来事を経験されたことを知っております。事情は違いますが、以前住んでいたパリでも2015年の同時多発テロにより、大変なトラウマになる出来事を経験しているので、私には皆様の状況を理解できる気がします。皆様もそして私もこの出来事を念頭に置きながら、自分たちの街、生活をこれからも再構築していきましょう。

私は経験から、言語や文化の違いがあるにもかかわらず、人間は根本的には似ているということ学びました。私は異なる文化の違いを追求する代わりに、共通点を見つけるべきだと考えています。そうすることで、世界中の人々の間には、多くの共通点が存在することに気づくでしょう。私たちが話す外国語や他の国の芸術や文化を知ることは、人々の近さを実感するのに役立ちます。

東北地方で新しい経験を共有し、新しい人々に出会えることを心から嬉しく、楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。

マリクレール・ヴィダル Marie-Claire VIDAL

前院長の離任のご挨拶

フランスは素晴らしい国なので、日本の皆様にもっと知ってもらい、おいでいただきたいです。フランス語は難しくないのに、皆様にも学んで使って欲しいと思っています。来年はパリオリンピックも開催されます。その良いきっかけになれば嬉しいです。

福島は会津磐梯山など魅力的な場所がたくさんあり、また、果物や野菜など美味しいものも多く、東京と私が住んだ仙台とも近く、便利なところだと思いました。特に日本酒、桃そしてリンゴが美味しかったです。フランスへも紹介して、輸出したらいいと思っています。

観光や仕事で福島を訪れる度に感じたことは、地元の皆様が東日本大震災、そしてその後の原発事故の被害を受けて、ご苦労されたけれども、立ち直り前に進もうとしていらっしゃることを目にして感銘を受けました。皆様が温かく親切に接してくれて、本当に嬉しかったです。

私のふるさとはニースと言う地中海に面した温暖で気候の良い観光地です。近くにはモナコ公国、カンヌ映画祭で有名なカンヌがあります。皆様にもおいでいただきたいです。ニースのきれいな街を楽しんでいただきたいです。

最後になりましたが、皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

Grégory DUMAINE





私のフランス語日記 Mon journal en français Le voyage en Ouzbékistan où je me suis senti riche. ウズベキスタン旅行（金持ちになったと感じた国）

L'Ouzbékistan est un pays sur la route de la soie avec ces beaux bâtiments ,classés à L'Unesco. J'ai aspiré à le visiter, mais le problème de visa avec la lettre d'invitation m'a empêché d'y aller.

En 2006 je l'ai enfin visité avec ma femme, parce que le gouvernement ouzbek a permis le visa individuel aux Japonais quelques années avant.

L'avion d' Ouzbékistan airways était sans escale vers Tashkent, le vol était complet, mais à l'aéroport de Tashkent seulement 7 Japonais sont descendus. Et les autres passagers voyageaient pour Istanbul. Ce pays était encore peu choisi comme destination de tourisme.

À Tashkent , la capitale de l'Ouzbékistan, il n'y avait pas beaucoup de monuments historiques, ni de bâtiments élevés. Et puis nous avons visité quelques célèbres villes appartenants à l'héritage culturel dupays dans une voiture avec un guide, comme Samarcande, Khiva,Bouchard, etc. Cette fois- ci, je vais décrire quelques expériences pendant le voyage.

Les infrastructures ouzbek étaient insuffisantes, même 15 ans après l'indépendance de l'URSS (l'Union des Républiques Socialistes Soviétiques).

Traversant le désert plus d'une demi- journée, il n'y avait pas d'aire de repos.

À ma surprise, comme il n'y avait pas de pont pour la voiture, nous sommes passés par le pont de chemin de fer en voiture, avec seulement les roues gauches touchant les rails et donc la voiture inclinée de quelques degrés. Lors du passage, le chauffeur a suivi les directives du garde-barrière qui restait à l' entrée du pont et qui vérifiait l'approche d'un train.

Ce qui était plus surprenant, c'était les billets ouzbek que j'ai reçus. J'ai changé seulement 20 dollars en billets ouzbek.suom. Il y avait tellement de billets que je ne pouvais pas les mettre dans les poches de mon pantalon, J'ai été obligé de marcher dans la rue avec les billets dans les mains. C'était l' unique moment où je me suis senti embarrassé d'avoir de l'argent.

Près du bureau de change, des personnes se sont baladées dans la rue avec des grosses liasses de billets sur l'épaule proposant de faire du change.

Takashi HASEGAWA

ウズベキスタンはシルクロード上の重要地域であり、そこにはユネスコに登録された世界に誇る文化財が数多存在する。是非とも訪ねたいと思っていたが、相手の招待状やビザの問題で躊躇していた。

2006年について行くことができた、実はこの数年前にウズベキスタン政府が日本を含む数か国に個人ビザの発給を認めたのだった。

飛行機はウズベキスタン航空の直行便だった、座席はほぼ満席で、ずいぶん行く人が多いなと思ったが、タシケント空港で降りたのはたったの7人だった、他の乗客はイスタンブール行きだった。

ウズベキスタンの首都タシケントは歴史的にあまり見るべきものが無い様だった、建物も高い物は無かった。その後ガイド付きの乗用車で妻とともにサマルカンドやキヴ、ブハラ等を見て回った。今回はこの旅行中に経験した幾つかの事を記してみたい。

当時ウズベキスタンはソ連邦から独立して既に15年経っていたが、インフラ設備は未整備で、車で半日以上走っても休憩所すら無かった。驚いたのは川に車用の橋が架かってなく、鉄橋を渡った事だった、車の左側の車輪を線路に乗せ傾いたまま通過した、当然のことに鉄橋の入り口に番人がおり列車の来ない事を確認して番人の指示に従い通過した。



ウズベキスタンの紙幣

次に最も驚いたのは20ドルを両替した時だった、余りに多くのウズベキスタンの紙幣であるスムを渡され、とてもズボンのポケットに入らず両手で持って歩く羽目になった。この時が人生で唯一お金が邪魔だと感じた。

両替所の周りには札束を肩にかついでチェンジマネーと叫んでいる何人がぶらぶらしていた。

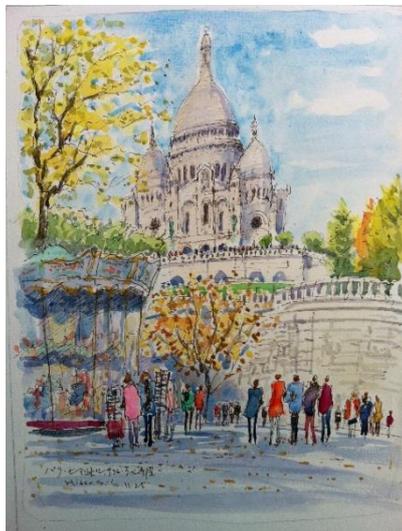
(フランス語会話教室受講生 長谷川 孝)



車窓より。鉄橋を渡る。

パリ・モンマルトル

パリは7回訪れました。そのうちスケッチだけの目的で7日間を3回訪れました。パリで一番高い丘モンマルトルは、お気に入りのスケッチポイントがたくさんありました。モンマルトルはゴッホ、ロートレック、ユトリロ、モディリアアーニ、ピカソなど多くの画家が絵を描いた場所、住んでいた場所としても有名で、その名残を今も色濃く残しています。



○サクレ・クール大聖堂

地下鉄を乗り継ぎ、ラマルクで降りしばらく歩くと、サクレ・クール大聖堂がその姿を現します。白亜の3つのドームが印象的なモンマルトルのシンボルです。ここは世界中から訪れる観光客でいつも賑やかで、観光客相手の危ない売り子もいます。青空に映えるこの大聖堂を見上げる位置からスケッチ開始です。スケッチを終え大聖堂の前の広場に行けば、パリの街が一望できます。大きな深呼吸をして、ああ！パリに来ている。と感傷に浸れます。

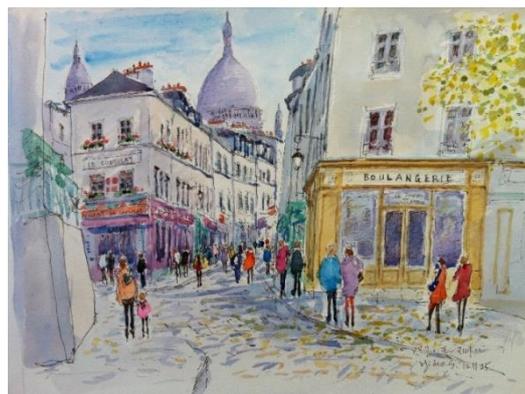
○テルトル広場

次のスケッチポイントはテルトル広場です。サン・ピエール・ド・モンマルトル教会が目前にあり、カフェやレストランに囲まれた賑やかな場所です。

広場には観光客相手の画家たちが集まり、日中はとても賑やかで活気にあふれています。さすが日中は人ばかりでスケッチは出来ません。朝の早い時間に来ます。

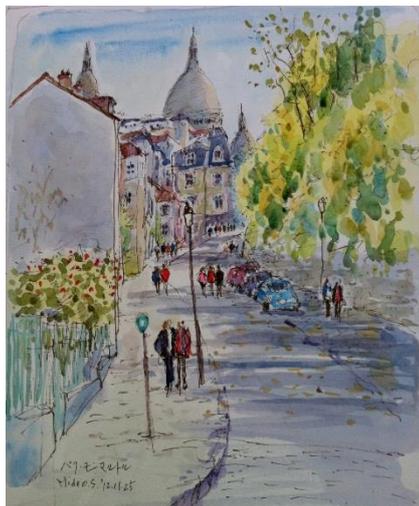
○ノルヴァン通り

サクレ・クール大聖堂やテルトル広場につながる通りですが、これぞ古き良きパリという雰囲気のある建物と並ぶ観光客であふれる通りです。正面の le Consulat の建物、その上にサクレ・クールの尖塔が見える。右の Kafe Montmartre がまた絵になる。この風景が好きで、旅行の都度に2度は訪れスケッチをする。SNSを見るとこの場所の絵が度々見つかるほど絵描きさんに好まれる場所です。



○ルピック通り

アベスの地下鉄駅を降りて、すぐの階段を上ると、ルピック通りが見下ろせる場所に出ます。ここからのサクレ・クールの尖塔が見えるのも好きです。一度目のスケッチ旅行で、早朝にスケッチを始めました。すると寒いのです。7月だというのに手がかじかむほどで身震いし始めました。さてどうしようかと思案した結果、下着の上に新聞紙を巻くことにしました。縮こまって何とか2時間頑張りました。



モンマルトルは、散策を楽しみ ふらり路地裏に入ると、素敵な景色に出会うことができます。

「愛してる」を250の言語で書かれた大きな青い壁 ジュテームの壁 もおすすめです。また、ブドウ畑がまだあります。

あ 思い出しました。昔、日仏協会のフランス語教室で一緒だった〇〇さんがフランス人と結婚してモンマルトルに住んでいました。訪ねたら可愛い娘さんと息子さんと優しい旦那さんに歓待してもらいました。良いスケッチ旅行の思い出です。

鈴木秀雄（会員）

ザンクト・ギルゲンのビルロート山荘

オーストリアのザルツブルクの東南に広がる山岳地帯はザルツカンマングートとよばれている。この風光明媚なザンクト・ヴォルフガング湖に面してザンクト・ギルゲン(St.Gilgen)という小さい町があり、ここはモーツァルトの母アンナが生まれた所で、姉ナンネルも結婚後ここに住んだ。母の生家は現在「モーツァルト記念館」になっている。マルクト広場には



ザンクト・ギルゲン

子供の頃のモーツァルトの像がある。ザンクト・ギルゲンは山と湖に囲まれた町で、山頂へのケーブルカーを使用すれば容易に1500mほどの山歩きがで

きる。この湖に面したところにパークホテル・ビルロート(Parkhotel Billroth)という小さなホテルがある。以前に当地を訪れたときにこのホテルのテラスで湖を眺めながら昼食をとったことがあった。

ビルロートは1881年1月に胃癌に対して初めて胃切除術を成功させた外科医で、100年以上も経った21世紀の外科医も胃切除の方法としてビルロートI法・II法という名前を使用している。彼がウィーン大学外科教授であった頃にここに山荘を作り、毎年夏一カ月から数カ月家族と共に過ごしたという。その山荘が改装され現在はホテルとなっており、受付にはビルロートの写真が飾っ

てある。ビルロートはドイツ生まれで、もともと音楽家になるつもりであったが、教育熱心な母親の強い反対でやむなく医学の道に進んだ。彼はウィーン大学在籍中に数々の業績を上げる一方、多忙な中ヴァ



Parkhotel Billroth
のレセプション

イオリンやピアノを演奏する時間を作った。彼の最も親しい友人がヨハネス・ブラームスであり、1865年ころから交流が始まっている。その頃ドイツ語圏ではベルリン大学外科が最高峰であり、彼はそこの教授に招かれたがブラームスとの交友が妨げられるので断りウィーンにとどまったという。1873年ブラームスからビルロートに捧げられた2つの弦楽四重奏曲(第一番ハ短調、第二番イ短調)は、音楽に傾倒した外科医の名前をとり、ビルロートI, II番として知られている。

ウィーンからザンクト・ギルゲンまでは300km近くある。オーストリア鉄道の資料を調べると1860年にウィーンとザルツブルク間の鉄道が完成して、その所要時間は9時間だったという。そんな交通の不便な時代に山荘を作り、1カ月も滞在するなんて、ウィーン大学医学部教授はなんと優雅な生活をしていたのであろうか。

土屋敦雄(会員)



久美子の歳時記～Jadore lesgateaux (14)

今回は世界中を魅了し、愛され続ける憧れのフランス菓子の歴史について、少しだけふれてみたいと思います。フランスでお菓子作りが盛んになったのは14世紀からと言われています。最初は、はちみつやナッツ、果物などを入れて焼いた物で主に保存食であったようです。

フランス菓子発展の大きな理由は二つ。その一つが他国との交流、婚姻です。最も有名なものが、16世紀、イタリア、フィレンツェの富豪メディチ家令嬢のカトリーヌ・ド・メディシスがアンリ2世に嫁いだことによります。美食家のカトリーヌはイタリアの料理、お菓子を作る料理人やパティシエを侍女や嫁入り道具と一緒にフランスに持ち込み、それによりお菓子や料理の技術、マナーなどが伝わりました。マカロンも、その時伝わったお菓子です。イタリアが料理、お菓子の先進国だった?と思った私ですが、そもそもお菓子はエジプトに始まり、ギリシャを経てローマ帝国で開花、発展し、ヨーロッパ中に広げたもの。美味しい物のルーツはそ

う、イタリアと言われています。中世のフィレンツェの繁栄、メディチ家の庇護のもと花開いたルネサンス文化。忘れかけた世界史を紐解けば、なるほどです。チョコレートもスペイン王の娘アンヌとルイ13世との結婚により、同じようにフランスにもたらされ広がっていきました。

もう一つが中世の教会や修道院の存在です。非常に強い権力を持っていた協会や修道院は農民から小麦、はちみつ、卵、バターなどの材料を納めさせていました。またろうそくを作るために蜂を飼い、その副産物として蜂蜜が豊富だったとの話もあります。これらで作られたお菓子はミサや集会で配られ、庶民にも広がっていきました。カヌレはその代表のようなお菓子ですね。その後、フランス革命を経て、お菓子はより多くの人に広がり、発展を遂げて行く事となります。

(料理教室受講生 本田久美子)